

巻頭言

メディアセンター長

立教大学理学部 教授 枝元一之

今を去ることおよそ30年、昭和62年9月22日火曜日のことである。翌23日は休日（秋分の日）で、関東地方で皆既日食が見られることになっていた。天気予報によると翌日は申し分のない快晴である。皆既日食の見物には申し分のない好条件なので、せっかくなので山の上で日食を見ようと思立った。当時、まだ20代で独身だったので、基本的にヒマである。仕事を済ませた後、0:01 発の中央線夜行列車（今はもうない）に乗って、八ヶ岳に出かけていった。

翌日、美濃戸口より山に入り、計算通り八ヶ岳の主峰赤岳(2899 m)の山頂に達したところで日食を迎えた。雲一つない快晴の下、山上で迎えた日食は予想以上に怪奇であり、迫力があつた。私は自分のアイデアの秀逸さに、一人密かにほくそ笑んだものである。さて、日食を見学すれば、後は下山である。この時、往路を戻っておれば何の問題もなかったのだが、少し迷った後、往路とは反対方向の真教寺尾根ルートを下山路に取ることにした。この決断が後々の後悔の種になるとは、その時点では知る由もなかった。このルートは相当な難路で、頂上から下ればらくは、道というより垂直の壁である。相当に怖い思いをしたわけだが、後悔とはこのことではない。このルートの終点は、小海線の清里である。今は知らないが、当時清里は十代の女の子の聖地であり、休日ともなると全国から女の子が押し寄せる、男にとっての異境であった。このことは、いかに世間に疎い私でも知識としては知っていたのだが、何事によらず「知っている」と「分かっている」の間には大差がある。当時の清里とは、私の想像をはるかに超えた、恐るべき場所だったのである。

林道から清里の街に入っていくと、町外れの段階ですでに周囲は女の子で満ち溢れていた。職場が立教大学であればさほどのことは無いかもかもしれないが、当時東工大に務めていた私は半径100 m以内に女の子を見出す確率がほぼ皆無という毎日を送っており、この時点ですでに相当な衝撃であった。道を駅に向かってたどるにつれ、女の子の数は（村上春樹ふうに言う）黙示録的に増えていった。駅前広場の風景は凄絶であった。およそ百メートル四方の広場が、ほぼ立錐の余地なく女の子にうめつくされていた。その全員が、あこがれの清里の地を踏んでいることで興奮しており、声高にしゃべるため、その騒音（嬌音と言うべきか）は、こちらを押しつぶす勢いである。普段であれば、気の弱い私は一歩も広場に踏み込めなかったに違いない。しかし、私自身も八ヶ岳山麓の数時間に及ぶ単調な山道を、清里に着けばビールを呑むことのみを考えて耐え続けていたわけで、その時点ではビールのためならゾンビの群れにも突入する一匹のケダモノと化している。女の子をかき分け、なんとか駅前の売店に到達してビールを大量に購入、広場の適当な場所にリュックを置いて直ちに飲み始めた。2本ほどを飲み干したころ、憑依の落ちた狐憑きのごとく正気を取り戻した私は、あらためて周囲の状況を見ておどろいた。広場をうめつくす女の

子の集団は、私の周囲半径 10 メートルの領域のみポツカリと穴が開いていて、私は全方位からの敵意のこもった視線に貫かれていたのである。

すでに正気を取り戻した私は、しかしこのような状況を一人激しく納得した。女の子は、あこがれの清里に来るといので、皆精一杯おしゃれをして来ている。ところが私の格好は、上は T シャツ、下はジャージで、丸一日山を歩き回って汗と泥にまみれている。自分ではわからないが、おそらくかなり臭かったのではあるまいか。登山靴はとっくに脱いで足元は素足にサンダル履きであり、手には登山靴を入れたスーパーのレジ袋をぶら下げている。夜行で来たので、ひげは剃っておらず、むさ苦しい事この上ない。こんな者がビールを立ち飲みしているのであるから、女の子としては 1 cm でも遠ざかりたい、1 秒でも早く消えてほしいと思うのは当然である。この時感じた、強烈な「場違い感」は、今なお私の胸に深く刻まれている。

メディアセンターのセンター長を拝命して、ほぼ 1 年経った。最初にセンター会に出席した時、感じた「場違い感」は 30 年前の記憶を呼び起こすものであった。とにかく、みなさんが話している単語の意味がわからないのだ。私は、自らの無知を立教大の教員全体に一般化するつもりは毛頭ないが、よほど情報系に詳しくないかぎり、たいていの教員は同じ立場に立たされるとよく似た感慨を持つのではあるまいか。(今はある程度分かるように成りました。)

しかし、1 年間センターに関わってくると、少しは見るべきものが見えてくる。メディアセンターのこなしている膨大な業務は、現代の大学においては、研究・教育の死活を握るものとして、電気・水道と同等のライフラインである。しかし、大学に勤めるものの多くは、かつての私同様、インターネット等の情報サービスは空気や水と同様そこにあるのが当然、うまく動いて当然と思っており、これらのシステムが膨大な努力の結果維持されていることを知らない。皆様、うまく動いて当然とおられるのだ。前任者の平山先生よりセンター長を引き継ぐとき、平山先生にセンター長の業務とはなんですかと尋ねたところ、「いろんな場所で頭を下げ謝る事です」と言下に言われたのはこの辺りの消息を表すものであろう。(ただし、センター長拝命以来、まだ部長会で一度頭を下げただけだから、これは前任者のときよりセンター員全体のスキルが格段に向上していることの証左といえる。) 電気・水道と大きく異なるところは、その基盤はハード・ソフト両面で急激な進歩の中にあり、そのキャッチアップが大学の死命を制するということであろう。このような状況下、今後大学としてどのような情報システムを構築していけばよいかについて参考とすべきモデルは皆無であり、手探りで最良と思われる道を探るしか無い。大学としてどのような情報システムを構築していくかという方針は、本来は大学上層部において決断していくべきであろうが、情報のプロ集団としてメディアセンターの方針決定に対する参画も不可欠の状況にある。

センター長から言うのも変だが、メディアセンターは限られた人員の基で、このような状況下で実によく頑張っていると思うのである。しかし、現在進行形で進化しつつある情

報システムのもとで、日々増大しているメディアセンターの業務を考えると、大学として情報を扱う部局の拡充は必須かなと考えている。この点の具体化が、今後のセンター長の課題である。